

# 秋田県南秋田郡五城目町方言の副助詞

日高水穂

## I. はじめに

1. 調査対象地： 秋田県内の方言は、まず地理的条件を反映して、米代川流域の県北方言域（鹿角市・鹿角郡／大館市・北秋田郡／能代市・山本郡）、雄物川北部流域の中央方言域（男鹿市・南秋田郡／秋田市・河辺郡）、雄物川南部流域と子吉川流域の県南方言域（大曲市・仙北郡／横手市・平鹿郡／湯沢市・雄勝郡／本庄市・由利郡）に分けられる。さらに、近世の藩領制において、秋田県の大部分が佐竹氏の秋田藩に属していた中で、南部藩に属していた鹿角地方、本荘藩、亀田藩、矢島藩、仁賀保藩等に分かれていた由利地方が、それぞれ独自の言語的特徴を示す場合がある。今回の調査対象地は、秋田県中央方言域に位置する北秋田郡五城目町馬場目である。五城目町は、県の中心部である秋田市の北東に隣接する位置にあり、古くから市場町として発達してきた。現在も定期的に朝市が開かれ、活況を呈している。人口は1万3371人（平成7年度国勢調査）、町の面積の約80%が森林であり、林業が盛んである。
2. 調査年月日： 1998年3月11日 午後2時～4時30分
3. 話者： 伊藤幸雄 昭和2年10月17日生（70歳）  
伊藤クニ 昭和6年2月2日生（67歳）  
（※クニさんは、五城目町に隣接する井川町の出身）
4. 調査者・調査場所： 日高水穂・話者宅
5. 調査方法： 統一調査票による質問調査
6. その他： 当該方言には、語中・語末のカ行音、タ行音が有声化し、ガ行音、ザ行音、ダ行音、バ行音が鼻音化する性質がある。このいわゆる鼻濁音の表記として、ガ行音については「カ<sup>h</sup> [ŋa]」、ザ行音、ダ行音、バ行音については「<sup>h</sup>ザ [˜za]」、「<sup>h</sup>ダ [˜da]」、「<sup>h</sup>バ [˜ba]」のように示す。さらに、シ／ス、チ／ツ、ジ／ズがそれぞれイ列音（ただし中舌音の [ɾ]）に統合する傾向があり、また単独で発音されるイ／エは狭母音の [e] で発音される傾向がある。表記上は、シとスを「シ [sɪ]」、チとツを「チ [tsɪ]」、ジとズを「ジ [zɪ]」、イとエを「エ [e]」として示すことにする。また、連母音 /ai/、/ae/ が融合した中間母音 [e] があるが、これについては、エ列音に「<sup>h</sup>ア」を付した表記で示すことにする（「<sup>h</sup>ネア [ne]」など）。また、[kwa] の発音がみられる場合があったがこれは、「クワ」と示した。  
なお、アクセント記号は都合により付さなかった。

## II. 調査結果

### (1) 添加・例示・提題などをあらわすもの

#### A. 添加《さえ・も》

1. 雨だけでなく風さえ吹いてきた。 ○アメンバリ<sup>ン</sup>デネグ カンゼモ フェデキタ。

(※「さえ」に当たる表現は用いない。)

2. 今年は豊作で、米ばかりか麦もよくとれた。

①コドシン<sup>ダ</sup>ッパ ホーサグ<sup>ン</sup>デ コメン<sup>バ</sup>リ<sup>ン</sup>デネグ ムキ<sup>・</sup>モ ヨグ トレダ。

②コドシン<sup>ダ</sup>ッパ ホーサグ<sup>ン</sup>デ コメモ ムキ<sup>・</sup>モ ヨグ トレダ。

(※提題助詞「は」は基本的に用いられず、「なら」に当たる「<sup>ン</sup>ダ<sup>ッ</sup>パ」を用いる。「ばかりか」に当たる「<sup>ン</sup>バ<sup>リ</sup>ガ」は一般的ではない。添加の「も」は、標準語と同様の用法が認められる。)

#### B. 予想外の事実《さえ・だけ》

3. 小学生でさえ簡単にワープロを使っている。

○ショーカ<sup>・</sup>クセ<sup>ン</sup>デシャモ カンタンニ ワープロ チガッテル。

(※「さえ」に当たる表現として「シャモ」が用いられる。ただし「モ」を伴わない「シャ」単独の形は用いられない。)

4. (宝くじが) 当たると思っていなかっただけに嬉しい。

○タガラ<sup>グ</sup>ジ アダルド モッテネガッタテニ オモシレーハー。

#### C. 条件《さえ》

5. 暇さえあれば釣りに行っている。

①ヒマ アレン<sup>バ</sup> チリニ エッテル。 / ②ヒマシャモ アレン<sup>バ</sup> チリニ エッテル。

(※「シャモ」については調査文3の注を参照。)

#### D. 例示《でも・ほど・まで・など・やら・なり・なんて》

6. まあ、お茶でも飲んでください。 ○マ<sup>ン</sup>ジ オチャッコ<sup>ン</sup>デモ ノ<sup>ン</sup>デケレシエ。

7. みやげにはこのまんじゅうなどどうかな。

○ミヤ<sup>ン</sup>ゲニ<sup>ン</sup>ダ<sup>ッ</sup>パ コノマン<sup>ン</sup>ジュー ナント<sup>ン</sup>ダ<sup>ッ</sup>ベガ。

(※「など」に当たる表現は用いられない。)

8. 思わず跳び上がるほど嬉しかった。

○オモワ<sup>ン</sup>ジ ト<sup>ン</sup>ビアカ<sup>・</sup>ル<sup>ン</sup>ダ<sup>ッ</sup>ゲ オモシレガッタ。

9. まさかあなたにまで話が行くとは思わなかった。

○マサガ オメアドゴ<sup>ン</sup>マ<sup>ン</sup>デ ハナシコ エグド オモワネガッタ。

10. なぐるやら蹴るやらの乱暴をはたらいた。

○ナク<sup>ク</sup>ッタリ ケッタリ ナント アクタエデ。

(※「アクタエデ」は「乱暴する」の意味の動詞「アクタレル」のテ形。)

11. 私になり相談してくれれば良かったのに。

○オレドサンデモ ソーダンシテケレバ エガッタノニ。

12. 野菜なんていくらでもできる。 ○ハダゲモノンダッパ ナンボンデモ デギル。

#### 一対の語の例示《だって》

13. しょうゆだってみそだって作っていたんだ。

○ショーユモ ミソモ コシヤンデアッタデア。

#### 択一《なり》

14. 私なり弟なりがお手伝いに行きます。

○オレンデモ オドドンデモ テチンダエニ エグシ。

#### 例外でない《とて》

15. 村長とて、そうするより仕方なかったんだろう。

○ソンチョーンダテ ソーシルヨリ シガタネガッタベ。

#### 列挙《も》

16. 春らしくなって、梅も桜も一度に咲いた。

○ハルラシグナッテ ウメモ サクラモ エックウエニ サエテアッタモンダハー。

#### 同類の暗示《も》

17. テレビもそろそろ買い替えよう。 ○テレビモ ソロソロ カワネンバネーネハー。

(※「カワネンバネー」は「買わなければならない」の意。)

#### やわらげ《でも》

18. まあ、お茶でも飲んでください。 ○マンジ オチャッコンデモ ノンデケレシエ。

### E. 包括《など》

19. 盆には子や孫などが帰ってくる。 ○ボンニンダッパ コヤ マンゴダ クツベシヤ。

(※「マンゴダ」の「ダ」は「達(たち)」に当たるもの。この文脈で「など」に当たる表現は用いられない。)

### F. 提題《だって》

20. ゲートボールだってできるよ。 ○ゲートボールモ シェダデア。

(※「シェダ」は「する」の能力可能の形式「シェル」のタ形。秋田方言では、状態性の動詞(「いる」、可能動詞)のタ形が現在の状態を表すことがある。)

#### 話題にあげる《って》

21. 何だい、いいことって。 ○ナンダッテシヤ エーコトツテ。

### 極端なものの提示《でも・くらい・すら・も》

22. そんなこと子供にでもできるよ。 ○ソソタゴド ワラシンデモ シェダデア。  
(※「シェダ」については調査文20の注を参照。)
23. 食べることくらいは何とかしたい。 ○クゴドグレアンダッパ ナントカシテア。
24. 名前すらろくに覚えていない。 ○ナメアシャモ ログニ オボエデネア。  
(※「シャモ」については調査文3の注を参照。)
25. 弁当代に千円もかかった。 ○ベントーダエサ センエンモ カガッタ。

### 軽いものをあげる《さえ》

26. これさえあればもう大丈夫だ。 ○コレシャモ アレンバ モー ダエンジョーブンダ。  
(※「シャモ」については調査文3の注を参照。)

## (2)分量・程度・基準などをあらわすもの

### G. 分量・程度《ほど・くらい・ばかり》

27. 旅行で三日ほど家をあげた。  
○リョゴーンデ ミカ {①ホッド／②ンバリ} エ アゲダ。
28. 茶碗に半分くらいください。  
○チャワンニ ハンブン {①ク・レア／②ンバリ／③ホッド} ケレ。
29. 子供にでもわかるくらいのやさしい本だ。  
○ワラシダッデモ ワガルクレアノ ヤサシホンダ。
30. 一週間ばかり留守にするので頼むよ。  
○エシューカンンバリ エニ エネアタメニ タノムデア。

### H. 基準《ほど》

31. 今年の寒さは去年ほどではない。  
○コドシノ サップサンダッパ キョネンホッドンデネア。

### I. 理由《ばかり》

32. ちょっと油断したばかりにとんでもないことになった。  
○チョット ユンダンシタッバリニ トンデモネーゴドニ ナッタ。

### J. 「それにふさわしく」《だけ》

33. 苦労しただけあって人間ができています。  
○ナンキ<sup>°</sup>シタッダゲアッテ ニンケ<sup>°</sup>ン デギテルナー。

### 形式名詞的用法《なんか》

34. 毎日孫の守りなんかで忙しい。 ○マエニチ マンゴカンデッデ エソガシ。

「それこそ」《こそ》

35. それこそバケツをひっくり返したような大雨だ。

○ソレコソ バケチ トックリゲアシタエンタ オーアメンダ。

「ばかりか」《ばかり》

36. 父ばかりか母もスポーツ好きだ。

○オドッバリッデネグ オガモ シポーチ シギンダナー。

(※「ばかりか」に当たる「ッバリガ」は一般的ではなく、「ばかりでなく」に当たる「ッバリッデネグ」が用いられる。)

K. 今にも行われる《ばかり》

37. もう食べるばかりにしてある。 ○アド クッバリニ シデアル。

動作の完了直後《ばかり》

38. 今、仕事から帰ったばかりだ。 ○エマ シコ<sup>・</sup>ドガラ キタンバリッダ。

基準《まで》

39. 駅までもうちょっとだ。 ○エキマンデ モー チョットンダ。

L. 等量の反復《ずつ》

40. 一人ずつ呼んで話をした。 ○ヒトリジチ ヨッパッテ ハナシ シタ。

M. 等量の配分《ずつ》

41. 一人に二個ずつみかんをやる。 ○ヒトリサ フタチジチ ミガン ケル。

(3) 限定・限界などを

N. 限定《しか・だけ・ばかり・きり》

42. 酒はたまにしか飲まない。 ○サケンダッパ タマニ {①シカ/②ヨカ} ノマネア。

43. 今朝は寝坊をしてパンだけ食べてきた。

○ケサ ネッポーシテ パンッバリ クテキタ。

44. そんなに勉強ばかりしていると体に毒だよ。

○ソントニ ベンキョーッバリ シテレッパ カラダサ ワリデア。

45. うちの田が残っているきりで、よそは全部終わった。

○オレノタンッポ ノコッテル {①ンダゲンデ/②ッバリッデ} ヨソンダッパ ゼンッパ デギタ。

O. 強調《しか・こそ》

46. もうこれだけしかないよ。 ○アド コレヨリ ネアデハー。

47. 今年こそいい年にしたい。 ○コドシンダッパ エートシニ シテァナー。

P. 限界《だけ・まで》

48. これだけ言っても分からないのか！ ○コンタニ エッテモ ワガンネガ。  
49. 2千円くらいまでなら何とかなる。  
○ニセンエンク<sup>・</sup>レアマンデ<sup>・</sup>ダッバ ナントカナル。

(4) 陳述的なもの

Q. 「～ば～だけ」《だけ》

50. 肥料をやればやるだけよく育つ。 ○コヤシ ヤレ<sup>・</sup>ッバ ヤル<sup>・</sup>ダ<sup>・</sup>ダ<sup>・</sup>ダ<sup>・</sup> ヨグ ソ<sup>・</sup>ダ<sup>・</sup>チ。

「仮定形・ば・こそ」《こそ》

51. 心配すればこそ言うんだ。 ○シンペ<sup>・</sup>ァシ<sup>・</sup>ェ<sup>・</sup>ッ<sup>・</sup>バ<sup>・</sup>コソ ユ<sup>・</sup>ツ<sup>・</sup>タ。

「こそ・仮定形」《こそ》

52. 彼は文句こそ言え、人の言うことなど聞かない。

○アレ<sup>・</sup>ダ<sup>・</sup>ッ<sup>・</sup>バ モ<sup>・</sup>ク<sup>・</sup>ダ<sup>・</sup>ッ<sup>・</sup>バ ユ<sup>・</sup>タ<sup>・</sup>ッ<sup>・</sup>テ ヒ<sup>・</sup>ト<sup>・</sup>ノ<sup>・</sup>コ<sup>・</sup>ド<sup>・</sup>ダ<sup>・</sup>キ<sup>・</sup>ヤ キ<sup>・</sup>カ<sup>・</sup>ネ<sup>・</sup>ァ。

53. 「～でこそあれ (コサレ)」という言い方はありますか。 ○ない。

「未然形・ば・こそ」《こそ》

54. 押しても引いても動かばこそ。 ○オシ<sup>・</sup>テ<sup>・</sup>モ ヒ<sup>・</sup>ー<sup>・</sup>テ<sup>・</sup>モ ウ<sup>・</sup>コ<sup>・</sup>ガ<sup>・</sup>ネ<sup>・</sup>ァ。

(※調査文のような「こそ」の用法は認められなかった。)

「～こそ。」《こそ》

55. 失礼なことを言わないでこそ。 ○シ<sup>・</sup>チ<sup>・</sup>レ<sup>・</sup>ナ<sup>・</sup>ゴ<sup>・</sup>ド エ<sup>・</sup>ワ<sup>・</sup>ネ<sup>・</sup>ァ<sup>・</sup>ン<sup>・</sup>デ<sup>・</sup>ケ<sup>・</sup>レ。

(※調査文のような「こそ」の用法は認められなかった。)

「～こそ～が」《こそ》

56. 今でこそ家から出ないが、昔はよく出歩いていた。

○エ<sup>・</sup>マ<sup>・</sup>ン<sup>・</sup>デ<sup>・</sup>コ<sup>・</sup>ソ エ<sup>・</sup>ガ<sup>・</sup>ラ ウ<sup>・</sup>コ<sup>・</sup>ガ<sup>・</sup>ネ<sup>・</sup>ァ<sup>・</sup>タ<sup>・</sup>ッ<sup>・</sup>テ ム<sup>・</sup>ガ<sup>・</sup>シ ヨ<sup>・</sup>グ デ<sup>・</sup>テ<sup>・</sup>ァ<sup>・</sup>ツ<sup>・</sup>タ<sup>・</sup>モ<sup>・</sup>ン<sup>・</sup>ダ。

「～ば～ほど」《ほど》

57. 働けば働くほどもうかる。 ○カ<sup>・</sup>シ<sup>・</sup>ェ<sup>・</sup>ク<sup>・</sup>ッ<sup>・</sup>バ カ<sup>・</sup>シ<sup>・</sup>ェ<sup>・</sup>ク<sup>・</sup>ホ<sup>・</sup>ド モ<sup>・</sup>ー<sup>・</sup>カ<sup>・</sup>ル<sup>・</sup>ベ。

R. 打ち消しとの呼応《まで》

58. 村長に聞くまでもないことだ。 ○ソ<sup>・</sup>ン<sup>・</sup>チ<sup>・</sup>ョ<sup>・</sup>ー<sup>・</sup>サ キ<sup>・</sup>グ<sup>・</sup>マ<sup>・</sup>ン<sup>・</sup>デ<sup>・</sup>ノ<sup>・</sup>コ<sup>・</sup>ト<sup>・</sup>モ ネ<sup>・</sup>ァ<sup>・</sup>ベ。

否定との呼応(それさえもない)《も》

59. 朝から忙しくて昼飯も食えない。

○ア<sup>・</sup>サ<sup>・</sup>マ<sup>・</sup>ガ<sup>・</sup>ラ エ<sup>・</sup>ソ<sup>・</sup>ン<sup>・</sup>ガ<sup>・</sup>シ<sup>・</sup>シ<sup>・</sup>テ ヒ<sup>・</sup>ル<sup>・</sup>メ<sup>・</sup>シ<sup>・</sup>モ ク<sup>・</sup>ワ<sup>・</sup>エ<sup>・</sup>ネ<sup>・</sup>ァ。

(※「エソ<sup>・</sup>ン<sup>・</sup>ガ<sup>・</sup>シ<sup>・</sup>シ<sup>・</sup>テ」のように、形容詞の連用形に当たる表現として「形容詞終止形+シテ」の形がある。「ク(食う)」の可能表現には可能動詞形の「クエル」と可能助動詞形の「クワレル (/hが脱落して「クワエル」となることがある)」がある。前者は能力可能の意味で用いられ、この調査文のような状況可能の意味では後者が用いられる。)

### 否定的取り上げ《など》

60. こんなものなどいくらだってあるよ。

○コンタモノンダキャ ナンボンデモ アルデア。

(※「ンダキャ」は指定辞「ンダ」に形容詞仮定形語尾に由来する「キャ (<ケレバ)」の後接したもので、語構成上は「ンダンバ (指定辞「ンダ」+仮定形語尾「ンバ)」と等価なものである。「ンダンバ」は県内全域で広く用いられ、提題助詞「は」に相当する用法と選択・対比的な「なら」に相当する用法を持つ。「ンダキャ」は、主に県北地域で用いられるようである。今回の話者では、調査文 52 やこの調査文のように、否定的な取り立てをする場合の「など」(あるいは「なんか」)に相当するものとして「ンダキャ」が用いられるようであった。)

### 全面否定《だって》

61. 誰だってそんなことを言われたら怒るよ。

○ダレンダッテ ソンタゴド エワレダラ ゴシャグベシャ。

### S. 次の動作が不可能《きり》

62. 10年前に故郷を離れたきり、一度も帰っていない。

○ジューネンメアニ ウチガラ デタキリ エチンドモ ケアツテコネアデハー。

### (5) モダリティー的なもの

### T. 不確かな気持ち《やら・か》

63. いつものまにやら眠ってしまった。 ○エツノマニカ ネムツテシマッタ。

64. 何のことか分からない。 ○ナンノコドンダカ ワガラネア。

### 推定《か》

65. 後で遊びに行くかもしれない。 ○アドンデ アソンビニ エグカモシエネア。

### どちらか分からない《やら》

66. 来るのやら来ないのやらよく分からない。

○クルモンダヤラ コネモンダヤラ ヨグ ワガラネア。

### はっきり言わない《やら》

67. どこやらへ引っ越したそうだと。 ○ドゴサンダヤラ ヒッコシタド。

### U. 非難《たら・てば》

68. お父さんたら今日も遅いのね。 ○トーサンダンバ キョーモオシェナー。

(※「ンダンバ」については調査文 60 の注を参照。)

69. お父さんてば、子供のようなことを言って。

○トーサンテッパ ワラシノエンタコド シャンベツテ。

### Ⅲ. まとめ

副助詞に関して秋田方言（特に今回の話者）に見られる特徴を以下にあげる。

①「さえ」に当たるものとして「シャモ」が回答された。ただし、「モ」を伴わない「シャ」単独の形では用いられないようである。また、この「シャモ」は「さえ」のすべての用法を覆うものではなく、調査文3（予想外の事実）、5（条件）、24（極端なものへの提示：「すら」の調査文）、26（軽いものをあげる）では用いられるが、調査文1（添加）では用いられなかった。

②秋田方言を含め、東北方言では「ばかり」に当たる「ンバリ」を、標準語では「だけ」が使用される文脈で使用することがある。今回の調査文の中で標準語で「だけ」が使用されるものについて、秋田方言で「ンダゲ」「ンバリ」が用いられるか否かをまとめておく。

「だけ」を含む調査文	ンダゲ	ンバリ
調査文4 「(宝くじが) 当たると思っていなかった <u>だけ</u> に嬉しい。」	×	×
調査文33 「苦勞した <u>だけ</u> あって人間ができている。」	○	×
調査文43 「今朝は寝坊をしてパン <u>だけ</u> 食べてきた。」	×	○
調査文48 「 <u>これだけ</u> 言っても分からないのか！」	×	×
調査文50 「肥料をやればやる <u>だけ</u> よく育つ。」	○	×

「ンバリ」が「だけ」の用法を覆うのは、調査文43のような「限定」の意味を持つ場合であり、「程度」を表す用法では「ンダゲ」が用いられる（調査文8参照）と言えそうである（調査文4・48も「程度」を表すと言えそうであるが、より適切な他の表現があるため、「ンダゲ」は使用されなかった）。標準語の「ばかり」の表す「限定」は、取り立てられた事物や事態の多数性が含意され（例文(a)参照）、唯一の一個を取り立てる「だけ」（例文(b)参照）の「限定」とは異なるのであるが、秋田方言の「ンバリ」は、事物・事態が単数・多数のいずれの場合であっても、他を排除して「限定」する意味の場合に用いられる。

(a) 毎日、雨{?だけ/○ばかり}降っている。 →メァニチ アメンバリ フッテル。

(b) この中で太郎{○だけ/×ばかり}が学生だ。 →コノウジンデ タローンバリ ガクセーダ。

なお、調査文46「もうこれだけしかないよ。」の下線部分について、「コレヨリ」が回答されているが、確認したところ「コレンバリヨリ」も可能だと言うことであった。「限定」の意味の「だけ」は「ンバリ」で置き換えられるわけである。

③標準語で「しか」を用いる文脈で「ヨリ（ヨカ）」用いるのも秋田方言の特徴である（調査文42・46参照）。逆に「比較」を表す格助詞「より」の用法に「シカ」が入り込んで、「オレンダンバ オメシカ タゲ（俺はお前より（背が）高い）」などと言う場合があるとされている（北条忠雄『秋田ことば』秋田魁新報社,1995参照）。今回の話者にも認められたが、一方で若年層話者にはほとんど見られず、衰退しつつある表現だと言える。

（ひだか みずほ 秋田大学）